

〃 第三百九十五大隊

大尉 脇本 幸男

独立混成第五十九旅団砲兵隊

大尉 遠藤 修三

独立混成五十九旅団工兵隊

少佐 美馬 敬一

〃 通信隊

大尉 清谷 州一

歩兵第三十聯隊

大佐 富沢 国松

独立速射砲第二十五中隊

海上挺進基地第四大隊ノ一中隊

山砲兵第二十八聯隊第五中隊

◇ 中地区隊(平良町北部)

長 騎兵第二十八聯隊長

大佐 上田 巖

騎兵第二十八聯隊

独立機関銃第十八大隊第三中隊

特設警備第二百九中隊

中尉 当間 林光

特設警備第二百十中隊

中尉 宮城 清昌

◇ 南地区隊(下地村一帯)

長 歩兵第三聯隊長 大佐 怡土 軍

歩兵第三聯隊

独立機関銃第十八大隊(二中隊欠)

少佐 斎藤 甚蔵

山砲兵第二十八聯隊第六中隊

海上挺進基地第三十八大隊

少佐 藤倉長太郎

野成作井第八中隊

◇ 伊良部支隊

独立歩兵一〇大隊ニ若干ノ砲兵ヲ配ス

(本項、六十ページ付記参照)

# 第四章 初空襲の洗礼

## (1) 敵機の独り舞台

昭和十九年十月十日晴れたった秋空の朝もやを衝いて不気味なサイレンの咆哮が宮古全島をふるわした。台湾東方海上を遊ぶ中のアメリカ第卅八機動部隊による沖縄初空襲が行なわれたのである。

第卅八機動部隊は正規空母十七、巡洋艦十四、駆逐艦五十八、計九十

四隻から成り、九百機の艦載機をようする強力部隊であった。

この日延べ八百余機が沖縄、宮古、石垣島に来襲、那覇では軍民合わせて千余名を殺傷、住家建物一万余戸を焼き、全市をまたたく間に廃きよと化さしめ、沖縄防衛の出鼻をくじいた。

宮古には午前七時卅分から八時十五分にかけて延べ十六機のグラマンが来襲、主として飛行場及び漲水港沖に淀泊中の船舶に攻撃を加えた。

初めて見る敵機の不気味な姿と轟音、豆をいるような機銃の音、地軸を揺がす高射砲弾の炸裂音はたちまち平和な宮古島を阿修羅の巷と化し、島民は粗末な防空壕のなかで息をひそめて大空を我が物顔に乱舞する敵機を凝視した。友軍の地上砲火は一斉に火を吹き、防禦網をくり展げたが、敵機はゆうゆうとして飛行場と船舶に急降下爆撃を加え、間もなく引き揚げた。まさか宮古までが敵機に蹂躪されるようなことはあるまいと一縷の望みをかけていた島民の期待は無惨にやぶれ、あらためて戦場化必至の絶望感が支配的となった。第一回の空襲が止み、ホッとしたのも束の間午後一時五分再びサイレンの音を追うようにして来襲した敵機は驚が獲物を狙うが如く平良港内の広田丸に襲いかかり、必至に回避する同船に爆弾、機銃の雨を浴びせて撃沈、ここを先途と撃ち上げる地上砲火を尻目に引き揚げた。

広田丸は栃木汽船所属の貨物船で二、二一ト、三輪寛寿船長ら船員四十九名が乗り込み、シヤムから米を満載して九月十七日バンコック発、キールン經由大阪へ向かう途中、平良港に寄港したところを不幸にして米空軍の攻撃を受けたものである。この目前後二回にわたる空襲で飛行場に待機中の友軍機九機が撃破され、さらに兵員十名が死傷、友軍の蒙った損害は少くなかった。

後日譚だが、広田丸と共に海中に沈んだ米はその後一部分が引き揚げられたが、臭気がひどくて一般の食用に不適のため酒造用に供された。食糧不足の当時としては全くモッタイない話だった。

越えて十三日午後三時四十分から四時十分にかけて十五機が来襲、主として中学校東側の海軍兵舎、製糖会社などの建物に銃爆撃を加えた。この日友軍の地上砲火は有効な弾幕を張ってグラマン一機を撃ち落した。敵機は白煙をふいて久松西海岸に落下、塔乗員は落下傘で降下、捕虜となった。敵機の傍若無人の振舞いに歯がみをしていた軍民は撃墜第一号に快哉を叫び、友軍の健斗を祝福した。

この捕虜は身柄を刑務支所の未決檻に収容、師団情報将校による訊問が行なわれたのち、数日後に台湾へ移送されたが、携帯品は棧橋際の大

阪商船代理店(店主源河朝善氏)の前に公開展示されて一般の敵愾心昂揚に供された。

しかしこの二日の空襲で友軍機の迎撃が全くなく、敵機の独り舞台に終らしめたこと、及び那覇市が全滅したらしいとの噂が軍の通信関係部隊から洩れ、民心の動揺は掩いがたいものがあつた。

大本営はいわゆる十、十空襲について翌十一日午後二時三十分次のように発表した。「十月十日七時頃より十五時三十分の間、四次に亘り敵艦載機四百機は南西諸島西方沖繩島、宮古島、奄美大島に來襲せり、所在の我が部隊はこれを迎撃、その二十六機以上を撃墜せり。

我方の損害 地上及び船舶に若干の損害あり

## (2) 台湾沖航空戦

敵機の跳梁するがままに隱忍自重、反撃の機を狙っていた日本空軍は十三日に至り、乾坤一擲の決戦を挑むべく立ち上がった。九州に展開を終った第一航空艦隊は鵬翼を連ねて南下、その第一陣百数十機は十三日夕銀翼を輝々かせて宮古島上空を通過、南方へ機影を没した。

久方ぶりで仰ぎみる友軍機の大編隊、島を掩いつくさんばかりの堂々たる鵬翼陣に軍民こそぞって歓声を揚げて見送り、回天の偉業ここに成るかに見えた。この日敵機の空襲直後に友軍機の大編隊が現われたので、スワツ敵の大空襲と早合点、もはやこれまでと覚悟のホゾをきめるといふ一幕もあつたようで、悲壮このうえもなかったが、友軍機とわかり、勇躍天に登るような心地がしたというのも無理からぬ話である。

かくて日本の運命をかけた台湾沖航空戦の火蓋が十三日から十六日にかけて台湾東方海上で繰り展げられ、三百数十機に上る日本空軍の精銳は敵機動部隊を強襲、大本営は戦艦五隻、空母十一隻、ほか合計二十数隻を轟沈したと鳴り物入りの大戦果を発表、国民を狂喜させたが、事実は何ぞはからん、わずかに巡洋艦など数隻を撃破したに止まり、これに對し我が方は航空機三百余機を一挙に喪失するという大敗北に終つたの

である。日本はすでに勝利の女神から完全に見放されていたのである。

十、十空襲の直前榑淵師団長は那覇の県立女学校で開かれた卅二軍兵団長会同に出席するため九日堀江専属副官をともなつて那覇へ出張していた。この兵団長会同に出席した宮崎少将(在石垣島独混四十五旅団長)の回顧によると、この会同では敵来攻に備えて沖繩防衛の万全を期

## 第五章 敵来攻前に守将更迭

### (1) 師団長、参謀長相次いで転出

二十年一月に入るやレイテ決戦は絶望的狀態を来し、敵は九日あらたに比島リンガエン湾に上陸、南西諸島をめぐる状態は日一日と緊迫の度を増してきた。十九年十月十日、十一日の空襲以来大がかりの空襲は杜絶していたが、大型機による偵察、海上補給路攻撃は頻繁につづき官民の不安と焦燥感は一層高まってきた。

このような状況に於て突如として先島群島防衛の最高責任者である集団長(第二十八師団長) つづいて参謀長の更迭が発令され、作戦準備がようやく軌道に乗りつつある実情に副わらない人事だとして奇異の感を与えた。

即ち第二十八師団長榑淵鍾一中将は一月十二日づけで在漢口第三十四軍司令官に、後任に台湾憲兵隊司令官納見敏郎中将がそれぞれ親補、次で二月一日付で参謀長福地春男少将が香港占領地総督部参謀長兼南支派遣軍参謀副長に、後任には広島師団参謀一瀬寿中佐(着任後大佐進級)が補職発令された。

栄転の榑淵中将は十六日朝九時専属副官堀江道徳大尉(福岡迄随行、

引き返して歩兵第三聯隊本部付となる)を帯同、参謀長を始め主だった部下らの見送りを受け、中飛行場を出発、空路那覇經由福岡に向かった。

後任の納見中将は十六日午後一時空路台湾から着任、直ちに那覇へ向かい、第三十二軍司令官に申告、先島防衛についての任務を受けると共に作戦準備についての打ち合わせを行ない、沖繩ホテルに於て前任の榑淵中将より申し送りを受け、十七日正午帰任した。

陸軍の将官人事は原則として陸軍省人事局長が参謀本部総務部長と打ち合わせて原案を作り、三長官(陸相、参謀総長、教育総監)の同意を得てきめる仕組みになって居り、例外として現地司令官の意見具申(インパール作戦参加の師団長三名が軍司令官の強い希望で入れ替えられたのはその好例)による場合があるが、今度の先島集團長人事は天降り式に決まったもので、事前に第三十二軍や第十方面軍には何らの連絡、相談はなかつたようだ。

普通一般的な考え方としては榑淵中将は昭和十六年進級の古参将官、序列上も軍司令官に出てもよい時期に来て居り、又当時戦線の拡大に伴なつて軍の新設、改編が頻繁に行なわれている際でもあつたので、順当な人事とみてもよいが、決戦を目前にしての守将交替は必ずしも適切と